

動物名を元にした英語の名詞転換動詞の特徴

小原 真子

1. はじめに

新しい語を作る語形成には様々な方法があるが、英語には語形を変えずに品詞を変える転換がある。たとえば、現代イギリス英語のコーパス *British National Corpus* (BNC) から検索した下記の例では、一般的には名詞として使われる *breakfast* や *serenade* などの名詞がそのまま動詞として使われており、それぞれ「朝食をとる」「セレナーデを歌う」という意味を表す¹。

(1) a. We rose at five-thirty and breakfasted outside on fresh mangoes.

私たちは5時30分に起きて、外で新鮮なマンゴーを朝食に食べた。

b. Men followed me home, sent me flowers, serenaded under my window.

男たちは私について家まで来て、花を贈り、窓の下でセレナーデを歌った。

英語の転換は、形容詞から名詞、名詞から形容詞、形容詞から動詞、動詞から形容詞など、あらゆる品詞間で観察されるが、もっとも生産的なのは、(1)のように名詞から動詞に転換する名詞転換動詞である(長野2018)。

この名詞転換動詞に関して、小原(2018)では、道具名詞 *rake* が名詞転換動詞となった時の用法について、その比喩的な拡張も含めて、コーパスのデータを用いて概観した。本稿では、動物名を元にした名詞転換動詞に着目し、その用法や意味の特徴を観察する。

本稿の構成は以下の通りである。まず2節では、どのような動物名が動詞として使われる可能性が高いのか、そして動詞となった時の意味について概観し、コーパスに現れる頻度を観察する。3節では、前節で観察した動物名の中でも頻度の高い *fish*, *dog*, *bug*, *snake*, *worm* について、動詞となった時の意味の詳細を整理し、コーパスに現れる意味の分布を観察する。4節はまとめである。

¹ 例文の下線、日本語訳は筆者が付したものである。

2. 動詞として使われる動物名

2.1. 動物名と動詞の意味関係

動物名が動詞として使われる時には、どのような意味に転用されるのだろうか。名詞転換動詞について網羅的な分類を行ったClark and Clark (1979)で見ると、動物名が現れるのは以下の3分類である。以下の例は、Clark and Clark (1979)からの抜粋であるが、(2a)のみ、元の動物名と動詞になった時の意味を併記する。

(2) a. 元の名詞の動物に典型的な振る舞いをする

ferret out the burglar (フェレット:泥棒を捜し出す)、fox the people (キツネ:人々をだます)、hound the politician (猟犬:政治家を追い回す)、parrot every word (オウム:すべての言葉をオウム返しに言う)、pig at the dinner table (豚:食事のときにががつ食べる)、squirrel away the money (リス:お金をため込む)

b. 元の名詞の動物を捕まえる、駆除する

crab (カニを捕る)、fish (魚を捕る、釣りをする)、mouse (ネズミを捕まえる)、shrimp (小エビを捕る)

c. 元の名詞の動物を産む

fawn (小鹿を産む)、foal (子馬を産む)、kitten (子猫を産む)、lamb (子羊を産む)、pup (子犬を産む)、whelp (犬・ライオン・オオカミなどの子を産む)

動物名を元にした動詞(2)のうち、(b,c)については、元の動物名からの意味が類推しやすい。(2b)は元の名詞が表す動物を捕まえることを意味するし、(2c)は元の名詞の動物を産むことを表す。しかし、(2a)の場合は、元の動物名と比較して分かるように、動詞になった時の意味が類推しにくい。(2a)ではそれぞれの名詞の動物の典型的な振る舞いから動詞の意味が転用されているが、ダイグナン(2010)が論じているように、これらの動物名では比喩的な意味で動詞への転用が起こっている。この比喩的意味は当該の動物の英語圏での役割やイメージに依拠している面が大きく、意味の類推が難しいことがある。たとえばferret outの「捜し出す」という動詞の意味は、フェレットがウサギやネズミを穴から追い出すために使われていたこと(『ジーニアス

英和大辞典』)が分かれば、理解しやすいが、そうした知識がなければ、動詞の意味は推測できない。

動物名は、以上のような3種類の意味の名詞転換動詞として使われているが、ここで一般的な語形成の際の意味特徴との関わりについて言及しておこう。語形成の際の意味特徴について、人工物と自然物では根本的な違いが見られることが先行研究で指摘されている。たとえば、Levin et al. (2019)は複合名詞の主要部と修飾語の関係を分析し、主要部が人工物であるか、自然物であるかによって、修飾語との関係が異なることを指摘している。人工物である場合には主要部の指示物の目的や製作に関する「事象 (event)」を示すことが多く、主要部の指示物が自然物である場合には、その「本質 (essences)」である外観、生息地などの性質を示すことが多いのである。同様の傾向が名詞転換動詞でも見られることが、Pustejovsky (1995)の提唱する特質構造(クオリア構造)を使って名詞転換動詞の分析をした影山(1999)、由本・影山(2011)、由本(2011)の一連の研究から推し量ることができる。人工物は目的役割、すなわち元の名詞の目的に関する事象を示すことが多いが、自然物は構成役割など、元の名詞の特徴的な本質が動詞の意味に転用されていることが多いとされている。

動物は自然物であるが、(2)の分類を「事象」「本質」の点から考えてみると、人工物と自然物の単純な二分法では片づけられないことに気づく。確かに、(2a)の用法は、比喩的とは言え、元の名詞の動物に特徴的だと考えられている典型的な振り舞いが動詞の意味に転用されており、「本質」を利用していると言えるであろう。しかし、(2b,c)に見られる用法では「元の名詞の動物を捕まえる・駆除する」「元の名詞の動物を産む」となっており、これらは元の動物に関連した「事象」であり、人工物に近い性質を示していると言える。それぞれの動物名を見ると、特に(2b)では、fish, shrimpなど動物として接する対象でなく、捕獲の対象となることが多いものである。動物は確かに自然物ではあるが、細かく観察すると、その中でも人間との関わり方の違いが動詞の意味の違いに現れているのだと言えよう。

ここまでは、動物名が動詞になった時の意味の分類を見たが、動詞にならない動物名も多数存在する。どのような動物名が動詞用法を持たないのか、動物名を網羅的に観察してみよう。

2.2. 動詞になる動物名／ならない動物名

動物名からの名詞転換動詞について言及している先行研究はいくつかある (Clark and Clark 1979, Martsa 2013, 由本・影山 2011) が、動詞になることのできる動物名の検討から始まっていることがほとんどである。ここでは、どのような特徴を持つ動物名が動詞になりやすいかを考えるために、動詞にならない動物名も含めて検討を始めた。

まず、動詞にならないものも含めて、偏りなく動物名を確認するため、大学英語教育学会基本語リストの新JACET8000 (2016) を用い、8000語の中から動物名に関連する108語を抽出した。このうち、上記基本語リストで、動詞としての用法が基本とされているbear (運ぶ; クマ) や、『ジーニアス英和辞典』で第一義が動物となっていないcrane (クレーン; ツル) などを除くと、101語が残った。残った動物名を『ジーニアス英和辞典』の語彙レベルの情報、「Aランク: 中学学習語、Bランク: 高校学習語、Cランク: 大学生・社会人に必要な語、Dランク: その他」に従って分類した。このうち、Aランク、Bランクの動物名45語を以下に示す。これ以降はAランク、Bランクの語を中心に検討する。

(3) a. Aランクの動物名 12語

animal, bird, cat, chicken, cow, dog, fish, horse, lion, mouse, rabbit, sheep

b. Bランクの動物名 33語

ant, bug, bull, butterfly, camel, cattle, deer, duck, eagle, elephant, fox, frog, goat, hen, insect, kitten, lamb, monkey, mosquito, pet, pig, pigeon, rat, shark, snake, spider, squirrel, tiger, turkey, virus, wolf, worm, whale

これらの動物名につき『リーダーズ英和辞典』、『ジーニアス英和大辞典』で、動詞用法があるか確認した後、BNCで当該の動物名の名詞用法が存在するかどうかを検索した。それぞれに関し、順次確認しよう。

まず、(3a) のAランクの動物名に関しては、辞書では、animal, cow, lion, sheep の4語に対して動詞用法が挙げられていなかった。同様に、(3b) のBランクに関しては、ant, butterfly, camel, cattle, deer, duck, elephant, frog, goat, hen, insect, mosquito, pigeon, shark, spider, tiger, turkey, virusの18語に対して動詞用法の記載がない。このうち、cow はBNCで動詞を検索すると、83件あるが、こ

れは同音異義語の動詞 *cow* (おどす) が使用されているためと考えられる。同様に、Bランクの *duck* もBNCには動詞用法が581件存在するが、こちらに関しても同音異義語の動詞 *duck* (ひょいとかがむ) があるためと考えられる。他にも、辞書には動詞用法がないが、BNCに1, 2件の検索例があるものがいくつかある (*lion, butterfly, cattle, insect, shark, spider*) が、これらに関しては、動詞としてはほぼ使われないものとみなして良いであろう。上記の例を除くと、動詞として使われ得る動物名は以下の23語である。

(4) a. Aランクの動物名 8語

bird, cat, chicken, dog, fish, horse, mouse, rabbit

b. Bランクの動物名 15語

bug, bull, eagle, fox, kitten, lamb, monkey, pet, pig, rat, snake, squirrel, wolf, worm, whale

以上をまとめると、A, Bランクすべての動物名45語に対し動詞用法があるものは23語となり、動詞として使われる可能性があるものは約半数であることが分かる。

次に、コーパスのデータを考慮に入れて考えると、辞書には動詞用法があるとされているものの、BNCで動詞用法の検索をしても使用例が見当たらないものもいくつかある。たとえば、Aランクの *bird, cat, mouse*、Bランクの *whale* はBNCでも現代アメリカ英語のコーパス、*Corpus of Contemporary American English (COCA)* でも動詞用法の例は見られない。また、*kitten* に関してはBNCに1件、COCAには0件で、ほとんど動詞としては使われていないと言えよう。これらを(4)から除くと、コーパスに動詞用法の例がある動物名は以下の18語となる。

(5) a. Aランクの動物名 5語

chicken, dog, fish, horse, rabbit

b. Bランクの動物名 13語

bug, bull, eagle, fox, lamb, monkey, pet, pig, rat, snake, squirrel, wolf, worm

これらの辞書に動詞用法が記載されており、コーパスにも用例がある動物名を

(2) に挙げた分類 (i) 元の名詞の動物に典型的な振る舞いをする、(ii) 元の名詞の動物を捕まえる、駆除する、(iii) 元の名詞を産む、に従って分類すると以下の通りになる。このうち、bug, wormなどの数語は、複数の分類にわたっている。また、上記3分類に当てはまらないものは、その他に分類した。

(6) a. 元の名詞の動物に典型的な振る舞いをする

bug(うるさく悩ます)、bull(押し進む)、chicken out(おじけづく)、
dog(尾行する)、fox(だます)、monkey(ふざける)、pig(ががつがつ食う)、
rat(裏切る)、snake(くねくね進む)、squirrel(ため込む)、
wolf(ががつがつ食う)、worm(はうように進む)

b. 元の名詞の動物を捕まえる、駆除する

bug(害虫を除く)、fish(魚を捕る)、rabbit(ウサギ狩りをする)、
rat(ネズミを捕る)、worm(虫を駆除する)

c. 元の名詞を産む

lamb(子羊を産む)

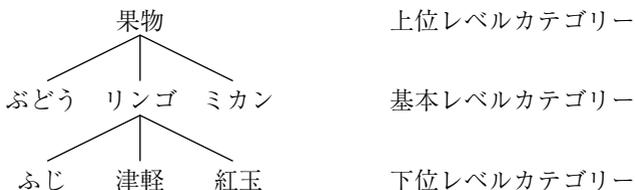
d. その他

bug(盗聴器をつける)、eagle([ゴルフ] イーグルである)、
horse(ばか騒ぎをする)、pet(かわいがる、なでる)

これらの動詞用法があり、コーパスに使用例がある動物名と、bird, catなどの使用例がない動物名にはどのような違いがあるのであろうか。

まず、動詞になる可能性のある動物名を(7)に見るレベル分けの観点から考えてみよう。

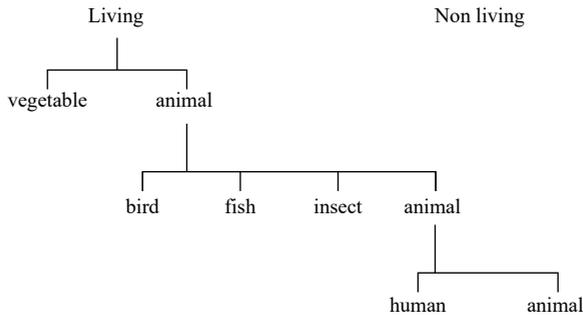
(7)



(谷口 2006, 26)

上記(7)のようなカテゴリーのレベルを考慮に入れると、上位レベルの *animal* など、抽象度が高い語には動詞用法が存在しないと言えるかもしれない。しかし、パーマー (1978) が論じるように、*animal* に関しては、下記の3つの異なったレベルに属している可能性がある。

(8)



(パーマー 1978, 102)

このように、*animal* という語をパーマー (1978) は「植物」と対照する意味の場合、「鳥、魚、昆虫」と対照する意味の場合、「人間」との対照として使われる意味の3種類の意味の多義語だとしている。ここでは、*animal* を上記のうち、「植物」と並ぶ上位レベルの語と想定しよう。動物名の中では、上位レベルの語 *animal*、そして *beast*, *species* などは動詞用法を持たず、それより下のレベルの *dog*, *pig* などが名詞転換動詞として働く。基本レベルを「他のカテゴリーとの区別をつけるのに十分な具象性 (具体性) を備えたカテゴリー」(谷口 2016, 27) ととらえると動詞用法を持つためにはある程度具体性が必要、ということになるであろう。ただし、これは元の名詞の意味の場によるところが大きく、上記の(8)で考えると、*vegetable* には動詞用法はないが、同じく上位レベルであるはずの *plant* (植物) には、「植える」という名詞転換動詞の用法があり、反対に *bird*, *fish*, *insect* のレベル内では *fish* だけに動詞用法があり、*bird*, *insect* にはない。さらに、*insect* の下位レベルには *worm*, *bug* など動詞用法がある動物名が存在する。このように見えてくると、動詞用法があるかどうかは抽象度の違いによるのではないことは明らかである。

また、動詞用法がない動物名を概観すると、lion, camel, elephant, tiger, whale など、比較的なじみの薄い動物には動詞用法がない、という可能性も考えられる。しかしながら、おそらく同程度のなじみ度であろうと考えられる ferret には冒頭で見たように動詞用法が存在するし、反対に sheep や cat, bird などなじみのある動物名でも動詞用法が見当たらないものもある。このような動詞用法のある動物とない動詞のない動物とを比較して、動詞用法の有無の理由を考えてみよう。たとえば、dog と cat は同程度になじみがあると言えるであろうが、dog の方が「人について歩く」といった特徴的な振る舞いを簡単に想定できるのに対して、cat の方はそういったイメージが湧きにくい。やはり、人間との関わりの中で、その動物に特徴的な典型的振る舞いやその動物に対して行う動作が想定できるかどうかによって動詞に転換する可能性が変わってくるのである。

2.3. 動物名と使用頻度

本節の最後に、コーパスにおける動物名の頻度について概観しよう。動物名と言えば、典型的には名詞として使うことが多い。Leech et al. (2001) に挙げられている高頻度の名詞の中から動物名に関するもの 8 番目までを下記に挙げる。動物名に対応している数値は 100 万語中何回当該の語が現れているかを示しており、活用形を 1 つにまとめた使用頻度である。BNC は 1 億語のコーパスなので、頻度としては下記の数値の 100 倍したものになる。

- | | |
|---------------|-----|
| (9) 1. animal | 153 |
| 2. horse | 126 |
| 3. dog | 124 |
| 4. fish | 105 |
| 5. species | 96 |
| 6. bird | 93 |
| 7. cat | 55 |
| 8. creature | 39 |

このように、名詞として動物名が使われる際には、抽象的な上位語である animal, species, creature などが高頻度で使用され、その他はなじみのある動物が

高頻度で使われる。これに対して、動物名を動詞にした場合の頻度はどうか。同様に Leech et al. (2001) の高頻度の動詞リストで確認してみると、100万語中10語以上までのリストで、動物名関係で記載されていたのは下記の3つのみである。

- (10) 1. bear 93
 2. seal 15
 3. fish 11

このうち、bear(クマ)、seal(アザラシ)は同音異義語の動詞bear(運ぶ)、seal(封をする)に対する頻度であろう。したがって、動物名であって名詞転換動詞として一番使用されているのはfishということになる。また、(9)、(10)を比較すると、名詞として使用される頻度と動詞としての頻度の高さは全く直結していないことは明らかである。

Leech et al. (2001) のリストではfishが高頻度であることしか分からないので、English-Corpora.org上のBNCで(6)に挙げたAレベル、Bレベルの動物名18語を動詞の場合に限定して活用形に関わらず検索した頻度の結果を(11)に挙げる。理由は不明であるが、fishの頻度に関して、Leech et al. (2001) と数値が異なるが、いずれにしても動物名の中ではfishが一番頻度が高いことに変わりはない。

- (11) 1 fish 965
 2 dog 207
 3 bug 198
 4 snake 144
 5 worm 88
 6 chicken 85
 7 pet 76
 8 rabbit 36
 9 wolf 35
 10 pig 33
 11 fox 29

12	rat	22
13	horse	16
14	bull	10
15	eagle	10
16	monkey	9
17	squirrel	7
18	lamb	5

上記の頻度で分かるように、高頻度であるfishを除いては、動物名を動詞にした名詞転換動詞の頻度は比較的低い。また、3節で検討するように、検索で動詞であるとして得られた結果を詳細に検討してみると、動詞でないものもかなり含まれているが、全体の傾向を概観するという意味で、上記の頻度順は参考になるであろう。上位5番目までの語を見ると、fish, dog, bug, snake, wormであり、どちらかという、マイナスイメージがある動物の方が多い。(9)の名詞用法の高頻度語では見られない特徴で、これらのことから当該の動物になじみがあるかどうかということとは別に、動詞として使用されていることは明らかである。

このセクションでは、動物名の辞書での記述から中学・高校レベルの動物名の語彙の中で動詞として使われる可能性のある語に限定し、その中でもコーパスなどから、実際に使われる頻度が高いものを概観した。次の章では、(11)の動物名の中から、頻度の高いfish, dog, bug, snake, wormの5語について、BNCのデータから、動詞としての用法を詳細に観察する。

3. 動物名の名詞転換動詞の意味の分布

動物名が名詞転換動詞として使われる時には、どのような意味で使われることが多いのであろうか。本節では、コーパス上で動詞としての検索件数が多いfish, dog, bug, snake, wormについて、動詞として使われる際のそれぞれの意味を詳細に観察する。手順としては、動物名の動詞用法をコーパスで活用形をまとめて検索し、得られた用例を意味ごとに手作業で分類した。検討の結果、動詞でない用例もかなり含まれている動物名もあった。それでは、一つ一つの語に対する結果を見てみよう。

3. 1. Fish

まず、動詞としての検索数が一番多い、fishの意味と用例を検討しよう。BNCでfishが動詞として使われているものを検索すると、964件であるが、そのうち221件は動詞ではないものであった。これらを除外すると、今回検討対象となるものは743件である。これらを、『ジーニアス英和大辞典』の語義にない、下記の通りに分類した。

- (12) a. 釣りをする、魚を捕る
- b. [水中から] 引き上げる
- c. (手探りで) 捜す、探る
- d. 取り出す、捜し出す
- e. [情報などを] 得ようとする

BNCのデータからそれぞれの例文を以下に挙げる。(13a,b)が「釣りをする、魚を捕る」にあたり、(13c)は類例でチンパンジーがシロアリを捕る様子を「釣りをする」ことにたとえたものである。(13d)は水中から魚を引き上げるように、様々なものを「水中から引き上げる」ために動詞fishが使われている。(13e,f)は対象物を探す場所を「水中」から「ポケット、財布、カバン」など中が見えない場所に移したものであり、動詞fishが「(釣りをするように) 見えない場所から対象物を探す、取り出す」といった行動を示すのに使われている。また、目に見えない「情報」などを「(釣りあげるように) 得る」という意味で(13g)のように使われる。

- (13) a. It was enough to fish for an hour and then go home.
一時間釣りをして、家に帰るので十分だった。
- b. Herons generally fish at dawn before the gardener has stirred...
サギは庭師が起きだす前の夜明けに魚をとる。
- c. One animal, however, has acquired the ability to fish termites out of their nests very much more swiftly.
しかしながら、ある動物が巣からもっと素早くシロアリを釣りだす能力を身につけた。
- d. They fished him out of the water.

- 彼らは彼を水から引き上げた。
- e. He fished in his pocket until he found a coin.
彼は硬貨を見つけるまでポケットを探った。
- f. She fished a paper tissue from her pocket and held it out.
彼女はポケットからティッシュを取り出すと、それを差し出した。
- g. Those who give the impression that they are fishing for information; …
情報を得ようとしている印象を与える人たち;…

分類の際に判断が困難だったものが11件、ことわざ (fish in troubled waters (混乱に乗じて利を得る)) を利用した例が1件あったので、これらを除外し、計731件の分類を下記に示す。上記の分類のうち、「釣りをする、魚を捕る、シロアリを釣る」は、「魚などを捕る」ことを意味するものとして、一つの分類にまとめた。また、「探す」、「取り出す」に関しては、動作を行う場所が同じで、ポケットなど対象物が入っている場所を「手探りで捜し」た上で、見つかったら「取り出す」、というように類似の場所に関する意味であることから、一つにまとめた。その上で、検討対象とした731件中、当該の意味となっている割合が多い順に示した。

	件数	割合 (%)
釣り・魚を捕る	574	79
探す・取り出す	113	15
引き上げる	42	6
得ようとする	2	0
計	731	

表1

表1に見られるように、動詞fishの場合は、基本的な「魚を捕る」意味が約8割を占めている。また、ポケットやカバンなどを「(手探りで) 探す、取り出す」が15%程度、「(水中から何かを) 引き上げる」は6%である。名詞転換動詞fishは他の動物名をもとにした動詞と比較して、使用頻度が高いが、基本的な「魚を捕る」ことに言及することが多いこと、「魚を捕る」ことに言及する場合に使う動詞の中でも一般的であることから、動物名を元にした名詞転換動

詞の中でも一番高頻度の動詞になっていると言えるであろう。

3.2. Dog

次に、dogの名詞転換動詞の検討に移ろう。先程と同様に、dogが動詞として使われている場合を検索すると205件であった。このうち、動詞でないもの22件を除外すると、183件である。これらを、下記の語義に従って分類した。

- (14) a. つけまわす、尾行する
b. (不幸などが) つきまとう

「つけまわす」の方は、犬がつきまとうように、「人」がつけまわす意味で使われているものであり、(14b)の方は、つきまとうものが「不幸」や「悲劇」など、抽象的になったものである。コーパスで検索した例をこれらの語義に従って分類したが、下記はその一例である。分類の際に、文脈から判断できなかった10件については除外したので、計173件となった。下記のBNCからの用例では、(15a)が「つけまわす」、(15b)が「つきまとう」の意味で使われているものである。

- (15) a. Every step they took was dogged by police officers.
彼らの行くところはどこでも、警察官につけまわされていた。
b. The girl's short life had been dogged by tragedy.
少女の短い人生は悲劇につきまとわれていた。

これらの意味でdogがBNCに出てきた割合を示すと、以下の通りである。

	件数	割合 (%)
つきまとう	151	87
つけまわす	22	13
計	173	

表 2

表2から分かるように、犬が人などについて回る様子から派生したと考えられ

る「つけまわす」という意味で使われているものが13%であるが、比喩的に拡張した用法である「(不幸などが) つきまとう」という用例の割合の方がはるかに多く、全体の8割以上を占めている。また、『ジーニアス英和大辞典』にも「(不幸などが)」という但し書きがあるが、確かにデータを見ると、「つきまとう」の意味で使われている用例にはmisfortune (不運)、problem (問題)などが連語となっていることが多く、マイナスイメージの動詞であることが分かる。元の名詞のdogとはことなり、名詞転換動詞のdogはマイナスイメージの傾向が強い語であると言えるであろう。

3. 3. Bug

次に、bug (虫) が動詞として使われている場合を検討しよう。この語は、他の語とは異なり、名詞としても「盗聴器」、「コンピュータのバグ」など、様々な用法に展開をしている。このうち「盗聴器」に関しては、『多義ネットワーク辞典』では、「虫」と「盗聴器」が形状に似ているところから意味の拡張が起こったものとされている。

これまでと同様に、BNCでbugが動詞として使われている場合を検索すると194件であったが、このうち、動詞でないもの42件、bug off (すばやく去る)、bug out (急いで逃げ出す) などイディオムとして使われているもの2件、派生動詞1件を除外すると、149件である。これらを、下記の語義に従って分類した。

- (16) a. 盗聴器を取り付ける、盗聴器で聞く
- b. (人を) 悩ます、困らせる
- c. 〈目を〉(驚きで) 丸くする

BNCで検索した例をこれらの語義に分類したが、下記はその一例である。(17a) が「盗聴器を取り付ける」、(17b) が「盗聴器で聞く」、(17c) が「悩ます」、(17d) が「目を丸くする」、そして (17e) は (16) の語義にはない、ゲームなどに「バグがある」の意味で使われている例である。分類の際に、文脈から判断できなかった15件については除外したので、計134件となった。

- (17) a. He also knew the room was bugged.

- 彼も部屋に盗聴器が取り付けられていると知っていた。
- b. …you should have warned me that my conversation might be bugged.
私の会話が盗聴されていると警告すべきだったのに…
- c. The weight issue seemed to bug her most:
体重の問題が彼女を一番悩ませているようだった。
- d. … in the bar in front of him, and his eyes bugged.
…バーで、彼の前で、そして彼は目を大きく見開いた
- e. … that made the game and to prove it isn't bugged…
…ゲームを作ったが、バグがないことを証明するために…

以上の意味をBNCに出てきた割合が多い順に示すと、以下の通りである。

	件数	割合 (%)
悩ます	49	37
盗聴器で聞く	45	34
盗聴器を取り付ける	38	28
目を丸くする	1	1
バグがある	1	1
計	134	

表 3

「盗聴器で聞く」「盗聴器を取り付ける」は分類としては分けたが、類似の意味としてまとめて良いであろう。したがって、bugが動詞となったときの一番分布が多い意味としては、6割強を占める盗聴器関係ということになる。この他、多い例としては「(虫のように)悩ます」で3割強である。この他の「目を丸くする」、「バグがある」などはほとんど使用例が見られなかった。

3. 4. Snake

次に、意味の拡張の興味深い例として、snake (蛇) が動詞として使われている場合を検討しよう。BNCで動詞のsnakeを検索すると144件であった。このうち、動詞でないものは4件であり、それらを除外すると、140件である。これらを、下記の意味に分類した。基本的に、各意味ともヘビの「くねって動

く様子」から拡張した意味であるが、(18a)は蛇行しながら進んでいる動的な意味であり、(18b)は道・川などが蛇行している様子を描写する静的な意味である。

- (18) a. (ヘビのように) 蛇行しながら進む
 b. 蛇行している (静的)
 c. くねくねと動く
 d. 体の部分をヘビのように動かす
 e. こっそり動く

BNCで検索した例をこれらの語義に分類したが、下記はその一例である。分類のできなかった4件については除外し、全部で136件を分類した。上記にも述べたように、snakeが動詞になった時には、基本的にヘビのくねくねとした動きを基本にした意味が多い。まず、(19a,b,c)のように人々や煙などが蛇行して進んでいる様を叙述するのに使われる。(19d)は道などが静的に蛇行している様子である。動的な移動動詞が道などの静的な状態を叙述するのに使われるのは、runなど他の移動動詞でも見られる (cf. The road runs along the coast. (道路は海岸に沿って延びている)『ジーニアス英和大辞典』)のものであり、このような意味拡張は移動動詞に一般的なものである。(19e)の「(ムチなどが)くねくねと動く」意味は、他の意味と別を立てておいたが、用例としては少なく、4件である。また、(19f)の「こっそり動く」の意味で使われている例も4件と数は少ない。この他、名詞転換動詞のsnakeの意味の中で興味深いのは、「体の部分をヘビのように動かす」意味で使われているものである。これは、体の一部をヘビに見立てて比喩的に動作を描写するのに使っているものと言えよう。この場合、ヘビに見立てられている体の部分は様々で、(19g)の手・腕などを回す用例が最も多いが、(19h,i)にあるように、舌、頭などもヘビのように動かす部分となり得る

- (19) a. ... and trails of black smoke snaked between the trees.
 そして、黒い煙の跡が木々の間をくねって進んだ。
 b. Something thin and black snaked out of the pit and wrapped itself around his ankle.

- 何か細くて黒いものが穴からくねって出てきて、彼の足首に巻きついた。
- c. When the milling crowd had snaked its way through each house, …
右往左往している群衆がそれぞれの家を蛇行して通ってきたとき、
- d. We followed a narrow path that snaked precariously down the escarpment side.
私たちは急斜面を蛇行して降りていく狭い小道をたどった。
- e. The long whip snaked towards it to snuff out the flame.
長いムチがそれ（ロウソク）に向かってくねって動き、炎を消した。
- f. He snaked off again and within minutes the throng began moving…
彼はまたこっそりと立ち去った。そして、数分のうちに、群衆が動き始めた
- g. She snaked her arms around his neck, pulling him closer.
彼女は彼の首に腕を回し、彼を近くに引き寄せた。
- h. Ruth's tongue snaked out to moisten her lips.
ルースの舌が唇を湿らせるように動いた。
- i. She snaked her head forward and bit hard into his nose…
彼女は首を前に動かして、彼の鼻にひどく噛みついた。

これらの意味に従って分類したものを、BNCに出てきた使用例の割合が多い順に示すと、以下の通りである。

	件数	割合 (%)
蛇行している (静的)	71	52
体の部分を蛇のように動かす	32	24
蛇行しながら進む	25	18
くねくねと動く	4	3
こっそり動く	4	3
計	136	

表 4

表 4 に見られるように、snakeが動詞になった時に最も頻度が高いのは、道や

川、ロープやホースなどをヘビに見立てて「蛇行している」意味を表すものであり、全体の5割を占める。その他に、「体の一部をヘビのように動かす」例が2割強で、「蛇行しながら進む」例が2割弱、ここまでで9割強の分布となる。名詞転換動詞のsnakeはヘビの典型的な動きの特徴「くねって動く」を利用して動詞に転換してから、その意味を動きのないものに拡張する、動くものをヘビから体の一部分などに拡張する、といった方法で意味を拡張していることが分かる。

3.5. Worm

最後に、worm（通例細長く柔らかい、脚のない虫『ジーニアス英和大辞典』）が動詞として使われている場合を検討しよう。Wormが動詞として使われている場合を検索すると87件であるが、このうち、動詞でないものが22件であったので、これらを除外すると65件が検討対象となる。Wormは動詞になると下記のような語義を持つ。

- (20) a. (人が) 徐々に進む
 b. 徐々に (好意・信用などを) 得る
 c. (情報などを) 徐々に引き出す
 d. 寄生虫を取り除く

このように、wormは脚のない虫の典型的な動き方から最も基本的な語義「徐々に進む」が出てくるが、そこから比喩的に「徐々に得る」「徐々に引き出す」などの意味に展開する。また、wormには名詞として「寄生虫」の意味もあり、そこから「動物などから寄生虫を取り除く」という全く違う意味でも使われる。BNCで検索した例をこれらの語義に分類したが、下記はその一例である。(21a) が「徐々に進む」、(21b) が「徐々に (好意・信頼などを) 得る」、(21c) が「(情報などを) 徐々に引き出す」、(21d) が「寄生虫を取り除く」の意味で使われているものである。分類の際に、文脈から判断できなかった2件については除外したので、計63件となった。

- (21) a. … she wormed her way to the reception desk.
 彼女は受付の方に少しずつ進んでいった。

- b. I don't know how you all managed to worm your way into our confidence, …
君たちがどうやって私たちの信頼を少しずつ得ることができたのか分からないが、
- c. I did manage to worm a few details out of him but strictly in confidence.
私は彼から極秘でいくつかの詳細を少しずつ引き出すことができた
- d. Consequently, all horses must be regularly wormed.
従って、すべての馬は定期的に寄生虫を取り除かなければならない。

これらの意味がBNCでの割合の多い順に示すと、以下の通りである。

	件数	割合 (%)
徐々に進む	31	49
寄生虫を取り除く	16	25
徐々に好意を得る	13	21
徐々に引き出す	3	5
計	63	

表 5

表5のように、動詞wormの場合は、虫の動きから派生した「(人が) 徐々に進む」が5割弱を占める。また、系統の違う意味である「寄生虫を取り除く」も25%である。これに対して比喩的に「徐々に好意を得る」意味で使われているのは2割程度、また「徐々に情報を引き出す」はほとんど用例がなかった。

3.6. 名詞転換動詞としての動物名の特徴

本節では、動物名の中でも名詞転換動詞としての用法がBNCで多いものについて、どのような意味で使用されているのか分類し、それぞれの意味の分布を調査した。語彙によって、基本的な用法が多いのか、比喩的な拡張用法が多いのか違いはあったが、全体的な傾向を概観しておきたい。

基本的な用法、比喩的な拡張用法の割合について、道具名詞rake (熊手) が名詞転換動詞として使用された時の意味の分布を小原 (2018) では観察した。その際には、当該の道具を使って「土をかく、落ち葉などをかき集める」等の基本的な意味で使われているものは全体の3割程度で、「もうける、髪をかき

上げる、視線で見る」など、比喩的に拡張した用法が多数あり、割合も多いのが特徴であった。今回は動物名の使用頻度を観察したが、この中では、fishは基本的な「魚を捕る」意味で使われているものが8割、dogは「(犬のように)つけまわす」という基本的な用法が1割強、比喩的拡張である「(不幸などが)つきまとう」の方が8割である。3番目のbugは「盗聴器」に関連する動詞用法が6割、比喩的拡張の「(虫のように)悩ます」が3割強であった。

このように、動物の特徴から直接的に連想される基本的な動詞の意味で使用されることが多いのか、比喩的な用法が多いのかは個々の動物名によってことになっている。また、冒頭で述べた人工物であれば「事象」に、自然物であれば「本質」に関連した語形成が行われる、という点に対しても動物名では様々である。確かに、動物の特徴をとらえた動詞用法であるものが多いが、今回調べた中でも、fishとwormの一部の意味などはそれぞれの動物を対象とした「捕る、駆除する」などの「事象」を動詞用法としていると考えられ、当該名詞が人工物か自然物か、という二分法では片づけられないことは明らかである。

また、道具名詞など人工物との大きな違いの一つとして、道具名詞の場合には、道具の使用目的など、動詞になる際に基本となる用法が予測しやすいが、動物に関しては、推測しにくいのが特徴と言える。本稿で観察してきたように、動物の場合には様々な特徴の中から何か一つ目立つ特徴を取り出し、他の面については除外して動詞化している。たとえば、dogに関して言えば、家畜であることが多く、番犬、狩猟犬、愛玩犬など様々な場面で活躍しているものであるが、動詞として使われるのは「つけまわす」という犬の特徴の側面だけで、その他の様態などは使われていない。またsnakeにしても、爬虫類で、毒のある蛇もいることから、あまり良いイメージを持たれていないと考えられるが、動詞になった時に利用されているのはその動く様子だけである。動詞として使われるのは動物の特徴のうち典型的な1,2個ということを示す良い例と言えるであろう。また、fishの「捜す」、dogの「つきまとう」、snakeの「へびのように体の部分を動かす」、wormの「徐々に進む」のように、動物の動きや特徴を利用して、人間の動きにまで拡張された用法があるのは興味深い。英語では人間の動作の様態を表す動詞の種類が多いのが特徴であるが、名詞転換動詞から動作への比喩的拡張が多く見られることが要因の一つと言えるであろう。

4. おわりに

本稿では、動物名が名詞転換動詞になった時の意味と使用例について、その特徴を観察した。まず2節で、動物名が動詞になった時の意味を整理した上で、動物名の中で何が動詞用法にまで拡張しているのか、またコーパスで動詞として使用されていることが多いものについて概観した。3節では使用頻度が多い5つの動物名に関して、意味を整理し、それぞれの意味の分布について調査した。自然物である動物名であるが、動詞に転換した時の意味は一様ではなく、また基本的な用法が多いもの、比喩的な用法が多いもの、と個別の動物名によって状況がことなっていた。その原因については、今後の検討課題の一つとしたい。

参考文献

- Clark, Eve V. and Herbert H. Clark. 1979. "When Nouns Surface as Verbs," *Language* 55, 767-811.
- Leech, Geoffrey, Paul Rayson and Andrew Wilson. 2016. *Word frequencies in written and spoken English : based on the British National Corpus*. Routledge
- Levin, Beth, Lelia Glass and Dan Jurafsky. 2019. "Systematicity in the semantics of noun compounds: The role of artifacts vs. natural kinds," *Linguistics* 57, 429-471.
- Martsa, Sándor. 2013. *Conversion in English : A Cognitive Semantic Approach*. Cambridge Scholars Publishing.
- Pustejovsky, James. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 小原真子 2018. 「コーパスに基づく名詞転換動詞rakeの分析」『島大言語文化』（島根大学法文学部紀要言語文化学科編）第45号.39-57.
- 影山太郎 1999 『形態論と意味』くろしお出版.
- 谷口一美 2006. 『学びのエクササイズ認知言語学』ひつじ書房.
- ダイグナン,アリス 2010. 『コーパスを活用した認知言語学』渡辺秀樹,大森文子,加野まきみ,小塚良孝訳.大修館書店.
- 大学英語教育学会基本語改訂特別委員会編著 2016 『大学英語教育学会基本語リスト：新JACET8000』桐原書店.
- 長野明子 2018. 「なぜiceは動詞としても使えるのか?-現代英語における転換-

- 63-86.米倉綽・中村芳久編『英語学が語るもの』くろしお出版.
パーマー, フランクR. 1978.『意味論入門』川本喬訳.白水社.
由本陽子 2011.『レキシコンに潜む文法とダイナミズム』開拓社.
由本陽子・影山太郎 2011.「名詞が動詞に変わるとき」影山太郎(編)『日英
対照 名詞の意味と構文』178-208.大修館書店.

辞書

- 『ジーニアス英和辞典』第5版.2014.大修館書店
『ジーニアス英和大辞典』2001.大修館書店
『多義ネットワーク辞典』2007.小学館
『リーダーズ英和辞典』第3版.2012.研究社

コーパス

- British National Corpus (<https://www.english-corpora.org/bnc/>)
Corpus of Contemporary American English (<https://www.english-corpora.org/coca/>)